

母性的対応と父性的対応について

1 母性と父性について

(1) 河合隼雄

① 母性原理

- ・ 母性原理は包含する機能、良きにつけ悪しきにつけ、包み込んでしまい、そこではすべてのものが絶対的に平等。わが子である限りすべて平等にかわいい。
- ・ しかし、母親は子どもが勝手に母のひざ元を離れることを許さない。
- ・ 危険から身を守るためでもあり、母子一体という根本原理の破壊を許さぬためでもある。
- ・ 母親は子どもを飲み込んでしまうこともある。
- ・ 肯定的な面は産み育てること、否定的な面は呑み込み、しがみつき、死に至らしめるもの。
- ・ グレートマザー 包み込む⇔飲み込む

② 父性原理

- ・ 父性原理は切断する機能。すべてを切断し、分割する
- ・ 主体と客体、善と悪、上と下などに分類し、子どもを能力や個性に応じて類別する
- ・ グレートファーザー 強いものを作り上げていく建設的な面と、破壊に至る面の両面を持つ

(2) 佐々木正美

① 母性原理

- ・ 無条件の保護←やさしさ
- ・ 子どものことを無条件で好き、ありのままを受け入れる。丸ごと抱きしめる。→子どもは自分の家で安心してくつろげる。外で辛いことがあっても、家へ帰ればホッとできる。
- ・ 母性が強すぎると、甘えん坊で自立できない人間が育つ

② 父性原理

- ・ 条件付きの愛情→厳しさ
- ・ 父性が強すぎると、幼児性と攻撃性が出てくる
- ・ 「そんなことしちやいけません」「お母さんの言う通りにしなさい。」(父性の強い家庭、非常に厳格な家庭)→思春期になって大人の言うことを聞かず、暴力的になる子、手を付けられない我儘な子

③ 母性的対応→父性的対応

- ・ 母性的なものが十分に与得られてからでないと、子どもは父性的なものを受け入れられない。
- ・ 母性によって、「自分は自分でいいんだという自尊心が十分に育っていないのに、しつけや厳しい教育的なことを言っても伝わらない。」

(3) 村本明嬉子

① 父性と母性

- ・ 父性は根拠のある安心感、母性は根拠のない安心感
- ・ 子どもを引き寄せる力が母性、子どもを引き離す力が父性
- ・ 母性は子どもを懐に引き寄せ、抱きしめ育む力、父性は子どもを自立させ母親から引き離す役割。

② 母性から父性へ

- ・ 母性的かかわり中心の時期→「何かができるから価値がある」のではなく、「その子の存在そのものに価値がある」ことを感覚で教えることが大切。これが、人間の根底の尊厳、つまり自己肯定感

を育てる。

- ・ その子がやってみたい、夢中になりたいと思っていることを存分にさせてあげること、その子の要求(WANT)をできる限り叶える。そして、そこで親と一緒に喜んだり、驚いたりと感じを共有してあげることが、その子の存在自体を肯定し、尊厳を育てることになる。
- ・ ここが十分に満たされないまま「何かができるから褒められる」に移行すると、アイデンティティが満たされず、「何かができないと、特別な価値がないと愛されない」という、役割の自分にしか価値を見出せなくなってしまう。
- ・ 父性の力は目的やビジョンを与える力。その子のために「行くべき方向」を示し、未来へと旅立たせてあげるのが父性の力。

(4) おやこ心理相談室

① 母親の役割

- ・ つなぐこと。そのために、母親は子の存在を「承認」しなければならない。→あるがままのその子を認め、その必要を満たす。
- ・ 思春期になると、親友や異性の方が親よりも大切になり、自然と親の存在が子どもの中から薄れていく。

② 父親の役割

- ・ 父親の役割は区切ること(3種類)。
- ・ 社会的父性→自分の家族と他の家族とを区別し、「この家族に責任を負う」
- ・ 「善悪」を区切る→世のおきてを敷き、ルールを守ることの大切さを家族に伝える
- ・ 母子の癒着を断つ→親たちと子どもたちとの間を明確に区切る

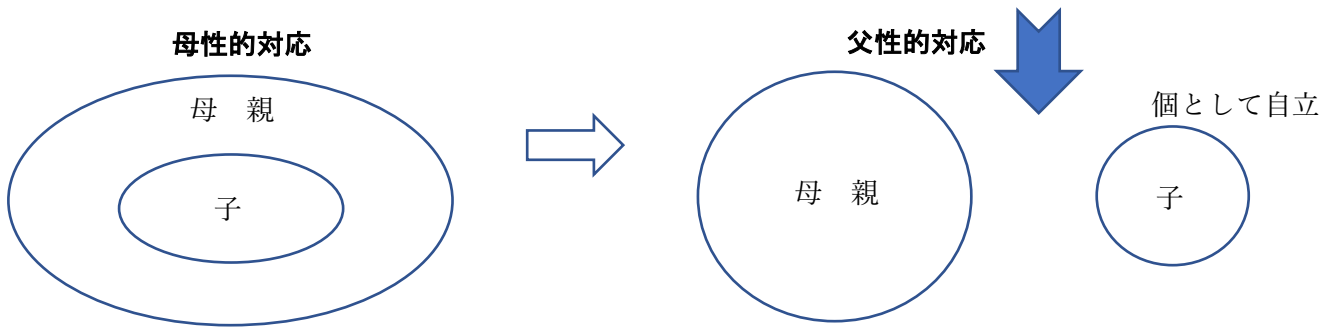
(5) 加藤尚武

- ① 母性の役割→子どもの母港のようなもので、子どもは母性という懐から外に出て冒険を楽しんでまた母港に帰る。
- ② 父性の役割は船出の手助けである。外部に向かって出発し、外部の世界で経験を積むことを促すのが父性の仕事である。また外部の世界から見た判断の枠組みを伝えるのも父性の仕事である。」

(6) まとめ

- ① 母性的対応とは、「包み込むかわり」「相手の存在そのものを認めるかわり」で、本人との関係形成にとって必要不可欠で、それによって自己肯定感が育まれる。しかし、状況によっては「包み込む」が「相手を飲み込む」に変わる恐ろしさ、危険性を持つ。
- ② 父性とは切り離し、区別する機能である。これは、母性の無条件の愛と比較すると、条件付きの愛情で、良いと判断されたものが評価される。又、パターナリズムの問題でも明らかなように、一定の価値観から人の自由を束縛し、行動を強制するという側面も持つ。医療や教育が永年そうであったように、利用者本人の意思決定を無視して保護的観点から力を行使するといったイメージがある。しかし、まず初めの「切り離す」という機能が、母子一体の関係を切り離し、個として自立させる機能だとすれば、自立への一歩という意味合いも持っている。又、「力で動かす」、「強制する」といった初歩的な過ちを乗り越えて本人と対話し、説得したり、納得するよう話していくことによって、本人を個として認め、意思決定を促し自立していくことを支援していく機能、社会の中で個として自立し、自分の人生を自分で決定していくことを支援する機能に昇華していくものと考えられる。まさに、「結びつける」「包み込む」母性と「切り離し」「区別する」父性が統合されることによって、場面に応じて、適切に母性的対応や父性的対応が行えるようになったり、のちに説明する「信頼して見守る」という態度が形成されるよう

になるのである。



2 療育における母性と父性の問題

(1) 法人における療育理論と方針

- ・ 人の学習の過程は、通常特定の人との関係(基本的信頼関係)をベースにして成り立つものであり、基本的信頼関係の形成の重視等関係論的視点から療育を考えると、投影や同一視など難しい問題にさらされながらも、信頼関係の形成を目指して本人とかかわっていくことが必要となる。
- ・ 基本的信頼関係の形成には3つの要素がある。まず第一は、特定の養育者が本人にとっての安全基地(アンカリングポイント)になることである。次に大切なのは、三項関係の形成であり、主に模倣学習を通しての学習が可能になる。又、このことは同時に養育者と本人との間での意味の共有を可能にし、言葉によるコミュニケーションの基礎が形成される。
- ・ 関係形成を目指すということは、支援者がある時期本人に対し母親的若しくは父親的にかかわるということであり、母性的対応や父性的対応について、意識的に検討していくことが大切になる。即ち、関係形成の時期には母性的な態度で接することが大切であるが、本人の自立の過程で意思決定を重視していく時期、又、二者関係を越えて、第三者との関係や社会へとつないでいく時には父性的な態度が重要である。
- ・ これらの態度は無意識的な基礎を持つ療育者の中にしみ込んだ価値観であるが、療育経験を通して、態度が徐々に意識的に変わっていくことは可能である。
- ・ この40年の療育経験を振り返ると、母性的な態度の獲得を中心に努力した時期、父性的な態度の重要性に気づいた時期、それらの統合に向けて試行錯誤を行った時期があり、現在は「母性的態度と父性的態度のバランスをとる」及び「信頼して見守る」という態度が自立に向けた課題を持っている利用者に対しては必要と考えている。
- ・ 人の変化の過程は弁証法的な変化のプロセスであり、母性的態度、そのアンチテーゼとして父性的態度、その統合的過程として、父性、母性のバランスを取る(状況に応じて、適切な態度が取れること)、および「信頼して見守る」という態度の形成が重要と考えている。
- ・ 「信頼して見守る」というのは、河合隼雄が思春期、青年期の人とかかわる時に重視した態度で、詳しく引用すると、「彼らに悪の可能性も含めた自由度を与えつつ、彼らを信頼することをしなくてはならない。」「(見守ることとは)、その人にできるだけ自由を許し、常に期待を失わずに傍に*続けることだと言えよう。*」と書かれている。
- ・ この中で「信頼する」ということは、事の良し悪しは評価しつつ、人として、その存在を信頼するということで、母性の無条件の愛と父性の条件付きの愛を統合した態度である。又、「見守る」という態度は、「してあげる」のでもなく「させる」のでもない、自身で行動し、体験していくこと、意思決定していくことを支える態度と言える。いずれも、母性、父性を統合したも

のと言えよう。

- ・ 母性的態度と父性的態度の統合というのは、療育者が主体的に支援の問題に取り組んで初めて自分自身の理論、方針として獲得できる能力であり、又、責任者が療育者の主体性を認め、相互の信頼関係の中で相談に乗り、育てていくことによって可能になるものである。即ち、相互主体という考え方を抜きにして、主体的な療育者の育成はあり得ない。
- ・ 対等に意見が言い合える環境で、チームでどちらの立場(父性的態度、母性的態度)も考慮しながら検討し、実践する、又その結果について検討を重ね仮説の修正を行う、こういった作業を繰り返すことを通して各自が主体的に自分自身の療育理論をエラボレイトしていけるものと思われる。